

# スポーツ施設のあり方について(答申素案)

## ～ 冬季スポーツ施設について ～

札幌市スポーツ振興審議会

## 目 次

1	札幌市における冬季スポーツ施設の体系	P 1
2	答申における想定年限	P 1
3	冬季スポーツ施設の現状と評価	
	(1) スノースポーツ施設	
	ア スキー場	P 2・3・4・5・6
	イ ジャンプ競技場	P 7・8・9・10
	ウ 歩くスキーコース	P 11・12・13・14
	(2) アイススポーツ施設	
	ア スケート場	P 15・16・17・18・19
	イ リュージュ競技場	P 20・21
4	冬季スポーツ施設の総括	P 22

## 1 札幌市における冬季スポーツ施設の体系

冬季スポーツ施設は、屋内系スポーツ施設（体育館、プール）のように行政区域（区という単位）ごとに配置されているわけではない。したがって、屋内系スポーツ施設と同様に施設規模、競技会の開催規模、利用者の志向性（競技志向、健康志向など）などで分類し、評価することは困難である。また、冬季スポーツ施設は、多用途、多目的の施設もあるが種目により限定されている施設が比較的多く、種目特性による分類が適していると考えられる。

よって冬季スポーツ施設については、冬季スポーツの種目特性から表1のとおり分類した。

表1：冬季スポーツ施設の分類

冬季スポーツ施設	スノースポーツ	アルペンスキー (スノーボードを含む)用の施設	ア スキー場
		ノルディックスキー (ジャンプ、クロスカントリー、歩くスキー)用の施設	イ ジャンプ競技場 ウ 歩くスキーコース、その他
	アイススポーツ	スケートおよびカーリング用の施設	エ スケート場(体育館、競技場という名称を含む)
		リュージュおよびスケルトン用の施設	オ リュージュ競技場(スケルトンを含む)

## 2 答申における想定年限

平成22年(2010年)～平成42年(2030年)までのおよそ20年間とする。

### 【理由】

- ・ 今後のスポーツ施設のあり方について検討を行う上では、人口規模やそれに伴う利用者の年齢層、ニーズの変化を把握することが重要であり、その基礎資料となる人口推計は、平成42年度(2030年)まで示されていること。
- ・ スポーツ部所管施設のうち、近い将来、耐用年数(注1)を迎える施設には、月寒体育館、美香保体育館(平成44年度(2032年))があり、この20年の間に何らかの対応が必要となること。

### 注1：耐用年数

市有建築物の資産管理基本方針から、経年劣化が進みつつある市有建築物を適切に維持し、延命化を図るため、事後的な保全から計画的な保全への移行を主眼とする基本方針であり、耐用年数は60年となっている。

### 3 冬季スポーツ施設の現状と評価

#### (1) スノースポーツ施設

##### ア スキー場

##### 【現状】

札幌市内には、市内中心部から自家用車でほぼ1時間圏内に大小合わせて6カ所のスキー場がある。コース数やリフトの設置数、最長滑走距離などから、大規模なスキー場に該当する施設は、「サッポロテイネ」（平成17年度テイネオリンピック、テイネハイランドスキー場を統合）のみである（表3参照）。それ以外の5つのスキー場は、中規模もしくは小規模な施設に該当する。競技会に関わる実施事業の実績などから、屋内スポーツ施設の分類に用いられたカテゴリー1（全国規模の大会が実施可能な施設）に該当する施設は、「サッポロテイネ」「さっぽろばんけいスキー場」「札幌国際スキー場」の3施設である（表4参照）。これらの3施設は民間企業の運営による施設であり、札幌市民や道民だけでなく国内外から多くのスキー愛好者やスノーボード愛好者を集客している。また、これらの施設は、1972年に開催された札幌冬季オリンピックのスキー競技（テイネにおける女子大回転）をはじめ、これまでも多くの国際的規模、全国規模のスキー大会やスキーイベントを実施してきており、「するスポーツ」だけではなく、「みるスポーツ」の拠点施設としても重要な役割を果たしてきている。

比較的中規模、小規模な施設のうち、「札幌藻岩山スキー場」「藤野野外スポーツ交流施設」「滝野スノーワールド」の3施設は、いずれも公設の施設である。これらのスキー場は、その規模や立地条件から、主に札幌市民の日常的な活動拠点として機能している。また、平成19年度までに存在した同規模の「真駒内スキー場」と「コバワールドスキー場」は、平成19年3月に「真駒内スキー場」、平成21年3月には「コバワールドスキー場」が相次いで閉鎖され、スキーおよびスノーボードにおける市民の日常的な活動の場は減少している。

表2：設置年月・所管・アクセス

施設	設置年月	所管	アクセス
サッポロテイネ	【テイネオリンピック】 昭和40年12月開業 ※平成17年度テイネ オリンピック、テイネハイ ランドスキー場を統合	民間	・自家用車で市内中心部から約40分 ・JR手稲駅からバス18分 ・JR札幌駅からバス45分 ・地下鉄東西線「宮の沢」からバス25分 ・冬期間には札幌駅→宮の沢→麻生経由のバス運行
さっぽろばんけいスキー場	昭和43年12月開業		・自家用車で市内中心部から約20分。 ・地下鉄東西線「円山公園駅」からバス15分
札幌国際スキー場	昭和53年12月開業		・自家用車で市内中心部から約1時間 ・JR札幌駅からバス1時間半
札幌藻岩山スキー場	昭和35年開業	札幌市 (南区土木部)	・自家用車で市内中心部から約20分 ・地下鉄南北線「真駒内駅」からバス約10分 ・冬期間には地下鉄真駒内駅から臨時バス運行
藤野野外スポーツ交流施設	昭和38年12月開業 ※平成13年より現所管	札幌市 (スポーツ部)	・じょうてつバス「ふじの3条11丁目」下車 徒歩15分 ・自家用車で市内中心部から約30分 ・冬期間は無料送迎バス運行
滝野スノーワールド		国	・自家用車で市内中心部から約40分 ・地下鉄南北線「真駒内駅」よりバス約30分

表3：施設規模・付帯設備

施設	施設規模	付帯設備
サッポロテイネ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・初級～上級 13 コース</li> <li>・最長滑走距離 6,000m</li> <li>・リフト 13 基</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ナイター設備（夜9時まで営業）</li> <li>・レストラン</li> <li>・託児所(有料)</li> <li>・有料休憩所あり</li> <li>・駐車場 3,000 台</li> <li>【子ども用スノーエリア】</li> <li>・キッズパーク(有料)</li> </ul>
さっぽろばんけいスキー場	<ul style="list-style-type: none"> <li>・初心者～上級 15 コース</li> <li>・最長滑走距離 1,200m</li> <li>・FIS公認モーグルコース</li> <li>・クォーターパイプ設置</li> <li>・リフト 6 基</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ナイター設備（夜 10 時まで営業）</li> <li>・レストラン</li> <li>・託児所(有料)</li> <li>・医務室</li> <li>・駐車場 1,500 台</li> <li>【子ども用スノーエリア】</li> <li>・スノーキッズパーク(有料)</li> </ul>
札幌国際スキー場	<ul style="list-style-type: none"> <li>・初心者～上級 8 コース</li> <li>・最長滑走距離 3,600m</li> <li>・ボードパーク設置</li> <li>・リフト 5 基</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・レストラン</li> <li>・託児所(有料)</li> <li>・有料休憩所あり</li> <li>・駐車場 1,850 台</li> <li>【子ども用スノーエリア】</li> <li>スノーパーク(そり滑り用)</li> </ul>
札幌藻岩山スキー場	<ul style="list-style-type: none"> <li>・初心者～上級 10 コース</li> <li>・最長滑走距離 3,380m</li> <li>・リフト 5 基</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ナイター設備（夜9時まで営業）</li> <li>・レストラン</li> <li>・駐車場 750 台</li> <li>【子ども用スノーエリア】</li> <li>・なかよし広場(初心者や子どもの練習広場)</li> </ul>
藤野野外スポーツ交流施設	<ul style="list-style-type: none"> <li>・初級～上級 6 コース</li> <li>・最長滑走距離 1,800m</li> <li>・モーグルコース</li> <li>・クォーターパイプ</li> <li>・ストレートジャンプ</li> <li>・リフト 3 基</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ナイター設備(夜9時まで営業)</li> <li>・レストラン</li> <li>・駐車場 500 台</li> <li>【子ども用スノーエリア】</li> <li>・キッズランド</li> </ul>
滝野スノーワールド	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ファミリーゲレンデ 250m</li> <li>・リフト 1 基</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・レストラン</li> <li>【子ども用スノーエリア】</li> <li>・子どもの谷(スキー場とは隣接していない)</li> </ul>

図1：リフト延べ利用者数推移 ※市観光部「平成21年度版札幌の観光」より ※滝野スノーワールドは直接確認

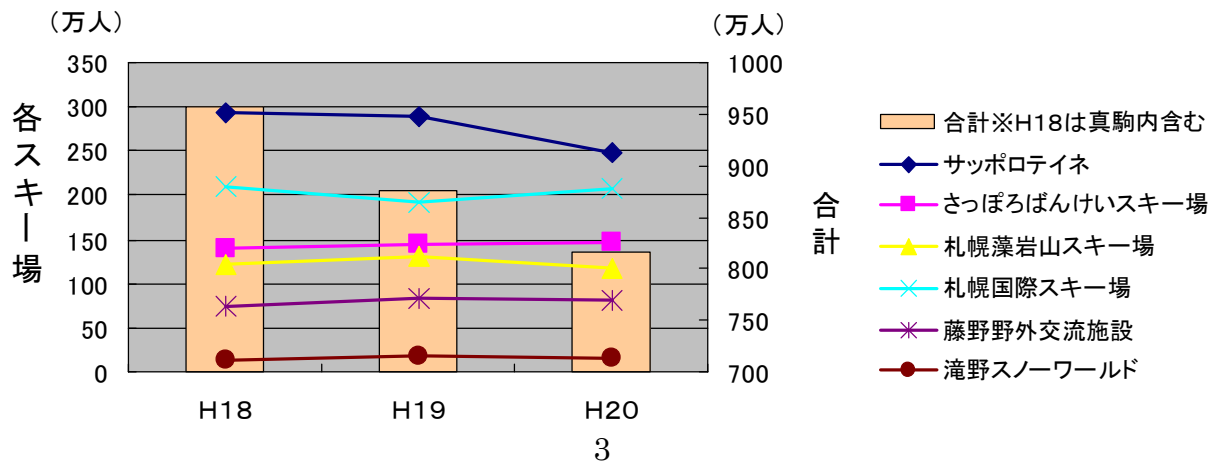


表4：実施事業の概要・コメント、特徴

施設	実施事業の概要	コメント・特徴
サッポロテイネ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国際レベルまでの各種大会の実施</li> <li>・SAJ公認等スキー教室</li> <li>・一般開放</li> </ul>	<p>札幌五輪の際に、ハイランドゾーンはアルペンスキー男女の大回転と回転競技の会場として、オリンピアゾーンはリュージュとボブスレーの会場として使用された。現在、リュージュとボブスレーのコースは使用不能となっている。</p> <p>スキーでは国際レベルの大会まで実施されている。また、市内でも比較的施設規模が大きく、バラエティーにとんだコースを持っている。</p> <p>また、託児所(有料)があることから、幼児を連れての来場でも、安心して楽しむ環境が整っている。</p>
さっぽろばんけいスキー場	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国際レベルまでの大会の実施(モーグル)</li> <li>・SAJ公認等スキー教室</li> <li>・一般開放</li> </ul>	<p>札幌市の中心部から比較的近距離にあるため、勤め帰りに立ち寄れるスキー場として有効に活用されている。</p> <p>モーグルでは国際レベルの大会まで開催されているなど、十分に活用されている。</p> <p>また、託児所(有料)があることから、幼児を連れての来場でも、安心して楽しむ環境が整っている。</p>
札幌国際スキー場	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全国レベルまでの各種大会の実施</li> <li>・SAJ公認等スキー教室</li> <li>・JSBA 公認等スノーボード教室</li> <li>・一般開放</li> </ul>	<p>全国レベルの大会も開催されており、利用者数も非常に多い。また、積雪量も多いため、11月中旬から5月のゴールデンウィークまで滑走可能である。</p> <p>また、他の施設と比較すると、雪質がよく、山麓には定山溪温泉もあることから、市民だけではなく道外の利用者も多い。</p> <p>さらに、託児所(有料)があることから、幼児を連れての来場でも、安心して楽しむ環境が整っている。</p>
札幌藻岩山スキー場	<ul style="list-style-type: none"> <li>・SAJ公認等スキー教室</li> <li>・自主事業の実施(ジャイアントスラローム大会、イベント等)</li> <li>・一般開放</li> <li>・スノーボード滑走禁止</li> </ul>	<p>札幌市の中心部から比較的近距離にあるため、勤め帰りに立ち寄れるスキー場として有効に活用されている。</p> <p>また、スノーボードの滑走が禁止されているために、スキー利用者にとっては利用しやすい施設である。</p>
藤野野外スポーツ交流施設	<ul style="list-style-type: none"> <li>・SAJ公認等スキー教室</li> <li>・JSBA 公認のスノーボード教室</li> <li>・自主事業の実施(モーグル大会、イベント等)</li> <li>・一般開放</li> </ul>	<p>スキー・スノーボードだけではなく、様々なウィンタースポーツの用具を貸し出しており、幅広いウィンタースポーツを体験することができる。</p> <p>また、夏期は多目的広場として開放しており、自転車競技やグループで楽しめる用具の有料貸出や、自由に遊ぶことのできる広場、バーベキュースペースなどがあり、通年に渡り屋外に親しむことのできる施設である。</p>
滝野スノーワールド	<ul style="list-style-type: none"> <li>・幼児～小学生対象のスキー教室</li> <li>・一般開放</li> </ul>	<p>初心者や子ども向けのゲレンデと、様々な雪遊びの場がある。</p>

## 【評価】

スキーやスノーボードは、必ずしも日常生活圏だけで行われるスポーツではない。スキーやスノーボード愛好者の多くが、その技能レベルや興味・関心に合わせてスキー場を選択するのであり、「身近な場所にある」ということはその選択肢のうちの一つに過ぎない。札幌市民も例外ではなく、旅行を兼ねてニセコエリアや富良野まで出かけることもあれば、営業開始が早いという理由で小樽のスキー場に出かけることもある。しかしながら、自家用車で市内中心部からほぼ1時間圏内に大小合わせて6カ所のスキー場を有することは、市民がスノースポーツに関わる環境として非常に恵まれていると言える。

過去3年間のリフト利用者数は、「サッポロテイネ」、「札幌藻岩山スキー場」がやや減少の傾向を示しているが、「さっぽろばんけいスキー場」「札幌国際スキー場」「藤野野外スポーツ交流施設」「滝野スノーワールド」は、ほぼ横ばいである。(図1参照)しかしながら、過去3年間で、市内の二つのスキー場が相次いで閉鎖しているという現状を踏まえると、実質的にはリフト利用者数が減少していると捉えることもできる。近年は、札幌市内のスキー場に限らず、全国の多くのスキー場で利用者数(リフト利用者数)は減少している。前述したとおり、札幌は大都市でありながら、都市部に隣接して複数の雪質に恵まれたスキー場を有している。これは世界的にも貴重な環境であり、スノースポーツを普及・振興することは、個人の生活の向上だけでなく、地域の活性化などを含めて大きな意味がある。今後は、各スキー場の経営努力に委ねるだけではなく、スノースポーツの普及・振興に向けた抜本的な取り組みが求められる。

競技会やイベントといった事業の開催という視点から見ると、「サッポロテイネ」「さっぽろばんけいスキー場」「札幌国際スキー場」の3施設は、コースの数、長さ、リフトの数などから比較的規模が大きい大会やイベントが開催可能な施設であると判断できる。しかしながら、アルペンスキーにおける国際的な規模の大会(FIS公認のレース)を招致することなどを考えると標高差、滑走距離(コースの長さや幅)などで課題もある。「札幌藻岩山スキー場」と「藤野野外スポーツ交流施設」は、初心者から上級者まで滑走可能な複数のコースとリフト並びにナイター施設があり、さまざまな事業を行う上で十分な環境を有していると考えられる。特に札幌藻岩山スキー場は、市内中心部からのアクセスがよく、規模的に「さっぽろばんけいスキー場」とほぼ同等であることから、競技会やイベントの開催を含め、より積極的な活用方法の検討が必要である。世界トップクラスの選手のパフォーマンスに触れることができる環境を整備することは、次世代を担う子どもたちにとって有意義であるばかりでなく、観戦文化の醸成や地域の活性化にも大きな効果が期待できる。特に観戦文化の醸成は、スポーツ振興の大きな柱の一つであり、スノーボードやモーグルの大会を含め(スノースケートなど新しいスノースポーツも視野に入れながら)、それぞれのスキー場が可能な範囲で国際的な規模の大会やイベントの開催に向けたコースの整備等を検討すべきである。

スキー場にはさまざまな利用者が訪れる。それらは、スキー、スノーボード、そり、スノースケートなど種目が多様化しているだけではなく、技能レベル、年齢、性別、障がいの有無、観戦者、観光客など属性や「関わり方」という視点からも多様である。

施設としてのスキー場は、そのような多様な「目線」によって評価されるものであり、一元的に評価することは困難である。コース設計（最長滑走距離、斜度、リフトの効率）、付帯施設（ナイター照明、託児所、レストラン、駐車場、宿泊施設、温浴施設、バリアフリー、環境対策など）、各種サービス（飲食、索道、学習など）もそれぞれタイプの異なる利用者が、それぞれの有り様を求めており、評価も異なるのである。

札幌市内にあるそれぞれのスキー場は、交通アクセスの良さ、夜景の美しさ、スキースクールの質などさまざまな特長を有している。一方で施設の老朽化やトイレの不備（洋式トイレが狭い、寒いなど）、レストランにおけるメニューの貧困さ、スキー授業の受け入れなどによる駐車場の混雑（一般客が入れない）など課題を抱えている施設もある。今後は、それぞれのスキー場の特長を活かしながら、役割分担を明確にすることが求められる。それぞれのスキー場は、経営形態が異なるため困難な問題もあるが、行政が積極的な情報交換を支援するなど、連携を深めながら「差別化」をはかることが重要である。特に、札幌市スポーツ部が所管している「藤野野外スポーツ交流施設」は、中学校におけるスキー学習の減少などを踏まえた上で、学校教育との連携を強化し、青少年のスノースポーツの普及・振興でその特長を伸ばすなど、その役割を明確にすることが求められる。



## イ ジャンプ競技場

### 【現状】

札幌オリンピックで「日の丸飛行隊」として日本が金銀銅メダルを独占したスキージャンプ競技は、札幌ばかりでなくわが国にとっても重要な種目である。

現在市内には、国際レベルの大会を開催できるジャンプ場として「大倉山ジャンプ競技場」「宮の森ジャンプ競技場」の2施設がある。また、主にジュニア期の選手が利用するジャンプ場としても「荒井山シャンツェ」「手稲山シャンツェ」の2施設がある。

大倉山ジャンプ競技場も宮の森ジャンプ競技場も、観客席を含めてスポーツ観戦施設としての設備は整っている（表6参照）。しかし、観戦来場者は、一大会あたり大倉山ジャンプ競技場では平均約3,000人、宮の森ジャンプ競技場では平均約7～800人と極めて低調な値を示している（図2参照）。

また、大倉山への観光客の来場は多く、札幌の観光スポットとして平成20年度は第7位となっている（市観光部「平成21年度版札幌の観光」より）。

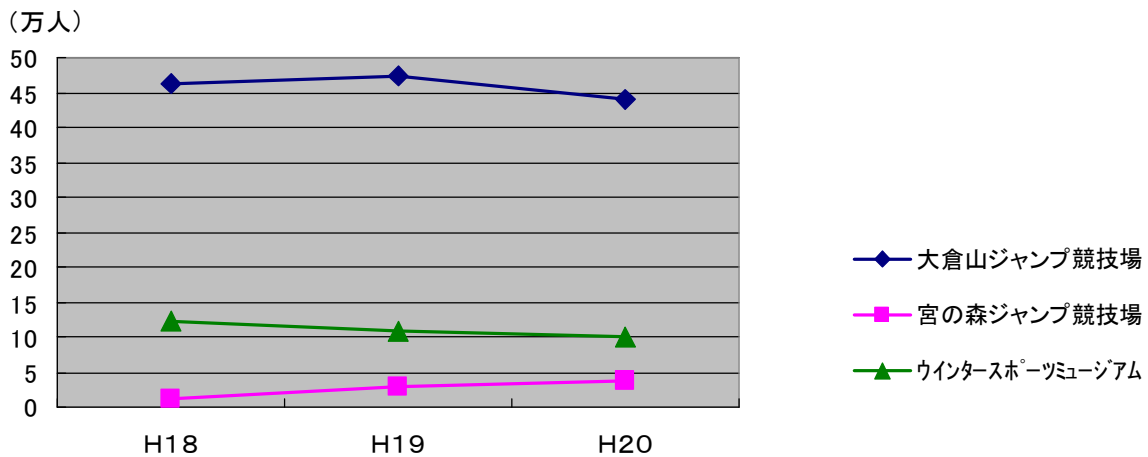
表5：設置年月・所管・アクセス

施設	設置年月	所管	アクセス
大倉山ジャンプ競技場	昭和45年12月	札幌市 (スポーツ部)	地下鉄東西線「円山公園駅」よりJRバス西14番「大倉山競技場入口」下車徒歩10分
宮の森ジャンプ競技場	昭和45年12月		地下鉄東西線「円山公園駅」よりJRバス西14番「宮の森シャンツェ前」下車徒歩10分
荒井山シャンツェ	平成15年11月 リニューアルオープン		地下鉄東西線「円山公園駅」よりJRバス西14番「荒井山」下車徒歩10分
手稲山シャンツェ	平成11年12月		<ul style="list-style-type: none"> <li>・自家用車で市内中心部より約40分</li> <li>・JR手稲駅からバス18分</li> <li>・JR札幌駅からバス45分</li> <li>・地下鉄宮の沢からバス25分</li> <li>・冬期間は札幌駅→宮の沢 →麻生経由のバス運行</li> </ul>

表 6 : 施設規模・付帯設備

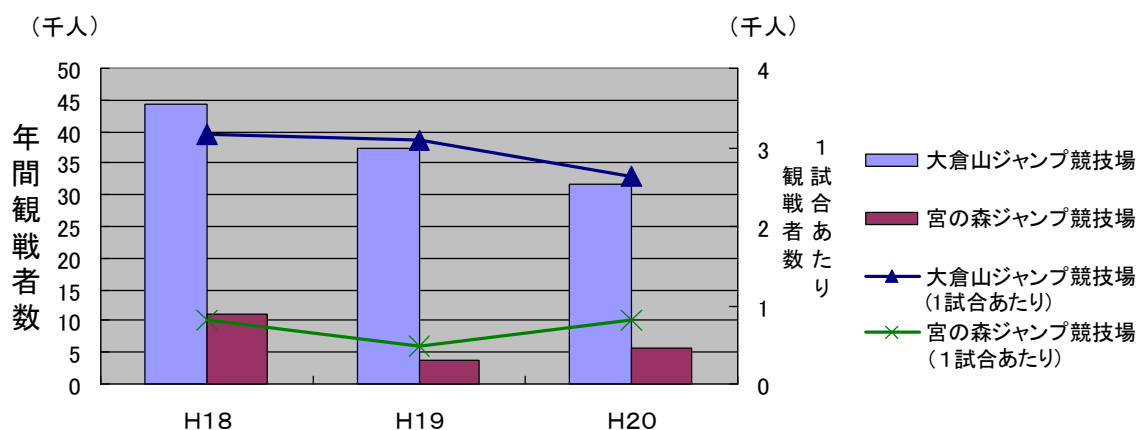
施設	施設規模	付帯設備
大倉山ジャンプ競技場	<ul style="list-style-type: none"> <li>・FIS 公認ジャンプ場</li> <li>【ラージヒル台】</li> <li>ヒルサイズ:134m</li> <li>K点:120m</li> <li>【観覧席】</li> <li>固定 3,500 席</li> <li>立見 46,500 人</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・札幌ウインタースポーツミュージアム</li> <li>※展示、体験館</li> <li>・レストラン</li> <li>・売店</li> <li>・展望台</li> <li>【駐車場】</li> <li>バス 15 台、乗用車 113 台</li> </ul>
宮の森ジャンプ競技場	<ul style="list-style-type: none"> <li>【ノーマルヒル台】</li> <li>ヒルサイズ:100m</li> <li>K点:90m</li> <li>【観覧席】</li> <li>30,000 人収容可</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>【駐車場】</li> <li>関係者用として数 10 台</li> </ul>
荒井山シャンツェ	<ul style="list-style-type: none"> <li>【ミディアムヒル台】</li> <li>ヒルサイズ:62m</li> <li>K点:55m</li> <li>【スモールヒル台】</li> <li>K点:25m</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>【駐車場】</li> <li>台数不明</li> </ul>
手稲山シャンツェ	<ul style="list-style-type: none"> <li>【スモールヒル台】</li> <li>K点:25m</li> </ul>	

図 2 : 施設参観者数推移 ※市スポーツ部「事業概要」より



施設	年度	施設参観者数
大倉山ジャンプ競技場	H18	462,646
	H19	474,295
	H20	440,808
宮の森ジャンプ競技場	H18	10,415
	H19	29,132
	H20	36,212
ウインタースポーツミュージアム	H18	121,946
	H19	108,922
	H20	99,114

図3：ジャンプ観戦者数推移 ※(財)札幌スキー連盟発表数



施設	年度	試合数	観戦者数 (人)	1試合あたり 観戦者数(人)	収容可能 人数(人)	観客席数に占める 実観客数割合(%)
大倉山ジャンプ競技場	H18	14	44,247	3,166	50,000	6.3
	H19	12	37,200	3,100		6.2
	H20	12	31,700	2,641		5.3
宮の森ジャンプ競技場	H18	14	11,220	801	30,000	2.7
	H19	8	3,800	475		1.6
	H20	7	5,600	800		2.7

表7：実施事業の概要・コメント、特徴

施設	実施事業の概要	コメント、特徴
大倉山ジャンプ競技場	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国際、全国レベルの大会の実施</li> <li>・スポーツ外イベントの実施</li> <li>・指定管理者主催のイベント</li> <li>・競技者の練習の場</li> <li>・観光目的の開放</li> </ul>	<p>大倉山、宮の森では、国内で開催されるトップレベルの大会の大半が通年に渡り開催されている。</p> <p>また、荒井山、手稲山は、主に小中学生の練習の場として活用されており、4施設は体系づけられて利用されている。</p> <p>また、大倉山は一般来場者が、リフトで山頂まで行くことができるほか、敷地内には「札幌ウインタースポーツミュージアム」もある。札幌ウインタースポーツミュージアムでは、札幌のウインタースポーツの歴史や、様々なウインタースポーツにゆかりのある展示品があり、その他、疑似体験ができるなど、観光資源となっている。</p>
宮の森ジャンプ競技場	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国際、全国レベルの大会の実施</li> <li>・競技者の練習の場</li> </ul>	
荒井山ジャンツェ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小中学生の全道規模の大会の実施</li> <li>・小中学生の競技者の練習の場</li> </ul>	
手稲山ジャンツェ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小中学生の競技者の練習の場</li> </ul>	

## 【評価】

札幌市は、国際レベルの大会を開催できる規格のジャンプ場2施設を保有する自治体として、長野県とともに、大きな社会的・公共的責任を果たしていると考えられる。主にジュニア期の選手が利用するジャンプ場も2施設があるが、未来のオリンピック選手を育成する環境は極めて良好と評価される。

これら4施設を公共スポーツ施設として考えるとき、二つの問題点がある。第一に、競技者専用の施設であることである。ジャンプは生命や大けがの危険も伴う特殊な競技であり、競技団体への登録を通じて「競技者」となった後、はじめてジャンプ場を利用することができる。したがって、競技者以外のいわゆる「一般ジャンパー」はわが国では存在せず、「するスポーツ」としての施設とはならない。これらジャンプ競技者のみに利用される施設が公共で維持される場合には、広く多くの市民に利用されること以外の公共性を主張できなければならないと言えよう。

その観点から、第二に、スポーツ観戦施設としての設備は整っているにもかかわらず、観戦施設としても利用率が低いという問題が指摘される。すなわち、一部のジャンプ競技者のための施設を、市の財政で維持する積極的な理由を提示する必要があり、観客や観光客の取り込みによる「みるスポーツ」の普及を、より積極的に展開していく必要がある。

そのためには、観光スポットとして飲食施設との協働により、現在の人気を助長することも考えられる。また、観光客の増えるシーズンに競技者の練習を公開したり、子ども向けの体験イベントを開催するなどして、ジャンプ競技を積極的にPRすることも必要である。例えばトップ選手のトレーニングを見学したり、実際に小さなジャンプを体験したりすることは、将来の競技者獲得につながることから、こうした活動は本来競技団体が主体的に展開すべきであり、札幌市には当該競技団体が広報しやすいような支援体制を整えることも求められると考えられる。ジャンプ競技場は集客力を高めることこそが、市が維持する施設としての公共性を主張する方策になると考えられる。